

1916年 (大正5年) [12歳]

「辰雄日誌1916」No. 1

— 1916年4月8日～5月23日 —

小池辰雄

東京高等師範学校 (現筑波大学) 附属中学校 1年乙組

日々の寝起の時間

春 起床 午前6時

消灯 午後9時半

日々の学校へ行く時刻

午前 7時～7時15分

毎日相当に勉強をする (覚悟)

夏 起床 5時半

○1916年4月8日 (土)

晴天。今日は朝6時半に起きた。そうして家を8時半に出た。学校へ着いた時は、友達は大勢居た。皆、笑顔で遊んで居った。僕も遊ばせてもらった。

その中にかねがなった。僕等は早くあつまった。朝礼がすむと、すぐ講堂へ行った。主事先生や宮下先生の注意すべき御話をうかがって、それぞれ教室へ入った。この御話の内、で僕が一番感じた点はまじめという事と男らしいという事とであった。教室へかえっても、先生からくわしく御話があった。

僕は今日の御話を深くこれから後、頭において進んで行こうと思った。家へかえって少し予習をした。本も読んだ (フランダースの犬)。おだやかな話である。夕はんをすまして湯に入った。ねたのは前頁のとおりである。今日の事を顧みてわるい事をしたという事はべつにかんじない。

○1916年4月9日 (日)

晴天。今日7時に起きてしまった。大方日曜だから、気がゆったりしたのでろう。午前中は別にかわった事もない。唯予習を少ししただけである。午後3時ごろであった。なんだか風にまぎれて爆音が聞こえた。僕は飛行機が来たのかと空をしきりにながめるが、すこしのかげもない。そのうちに空に五分ぐらいのながさのごみみたいなのが見えた。僕はこれを一心に見ていたが、それはスミスの乗っている飛行機であると言う事がわかった。横転飛行。宙返り。急転直下。見るも勇ましい有様である。夜に僕の一番上の兄が寮へはいっ



た。夜は規律どうりにねた。

○1916年4月10日 (月)

晴天。風強し。今朝起きた時は少しおそかった。僕が喜ぶと共に桜の花も笑いだした。学校へ行くのも早かった。学校へ行ってもまだほんとの授業にかからないのもあった。それは皆我々の長く記憶すべき御話である。予習・復習をやった。今日は別にかわった事もなかった。

○1916年4月11日 (火)

朝曇り後晴天。学校へ行く時、尋常1年生と行った。両方とも1年生、実につうかいな様であつただろう。

英語の時間に英語の先生 (石黒先生) のお話があつた。そのお話は英語をどうして学ばなければならぬかという事である。一には大いに学問を学ぶため。二には英語は世界の方々とつかつて、よく共通するからである。三には日本はまだまだ英国におとつてゐるから英語をやるのが必要である。四には少しでも英語が話せるとちつと英国人が話をかけた時、返答ができないと、面目がない。五には英語は、漢文や日本語で書きあらわす事のできないのを書きあらわせるというため、という様な事であつた。僕はこの話を聞いて英語をやるはりあいが出て来た。家へかえつてから夜6年の時のうけもちの先生の所へ何度目の御礼であるかわからないが、ていねいに行つて来た。湯に入つてねた。

○1916年4月12日 (水)

晴天。今日は学校で遊び時間に遊動円木ゆうどうえんぼくばかりで遊んだ。家へかえつて体をよくふいた。夕飯をたべてから屋根へでて、桜の花をながめた。まるで読本でならつたと同じ心持がした。春風がそよそよと吹渡つてゐる。僕の顔にあたつた時は実に気持がよかった。そこで清新なる空気を吸い、美景をながめた時の心持さ。この日誌をかいたのは9時15分であつた。大急ぎで9時半にねた。

○1916年4月13日 (木)

晴天。(反省録) 今日でも毎日の様に書取があつた。どうも形勢がわるい。朝すこし起きるのがおそかった。遊動円木だけがをしそうになつた。別に今日は書くことがない。

(嬉しい気分がよくあらわれている) (担任の短評)

○1916年4月14日 (金)

晴天、夜雨。今日学校で先生にしかられたが、僕はその仲間ではなかつた。先生も、大



そんな御立腹であった。僕も早かったら、外へ出たかもしれない。なおさら、わるいという事が感じた。先生がこんなことはわすれると、おっしゃったが、なかなかわすれられない。今日は4時まで遊んでかえった。かえって見れば、桜は風にふかれてひらひらと落した。もう落ちるのかと思うと、ものたりない様な感じがする。しかし、これはほんとにおちるのではないのだろう。夜の雨の音を聞いた時は気持がよかった。一時間早くねた。

(なかなかうまくいてある)〔担任の短評〕

○1916年4月15日 (土)

雨天。僕はまだゲートルをはいた事がないのである。はいて見たら、ずいぶんぶかつこうであった。体操の時の、おにごっこは実に、ゆかいであった。帰りに親類の医者所によつて目を見てもらった。

僕は土曜の晩は晩の中で一ばんすぎだ。翌日は日曜である。気はゆつたりするのである。ねるにも安心してねられた。

○1916年4月16日 (日)

晴天。朝起きて見ると雨はやんで、木の葉からしずくがぼたぼたおちていた。日は東の方が霧にけされて、ぼんやりとしていた。午前9時頃、昨日の医者所へ行つた。今日は一日中うちに居た。今日は父の命日である〔註：父小池政吉1856～1908〕。9時半にねた。

○1916年4月17日 (月)

晴天。朝少し起きおくれで、6時20分に起きた。今日も目を見てもらいに行つた。今日はなかなか目がいたくて夜の7時半頃までいたかつた。そのために勉強がよく出来なかつた。寝た時は少しおそかつた。

(目はどんな病ですか)〔担任の短評〕

○1916年4月18日 (火)

晴天。早桜もちり、葉も青々として花の間より芽を出して居る。まるで一日ぐらいしか咲いた感じがしない。

まだ学校へ行く時に何かわすれた様な気がする。今日の書取も大分ちがつた。学校の帰りに写真をうつした。今日は別に書く事がない。

○1916年4月19日 (水)

晴天。今朝は6時に起きた。学校1時間目は国語であつたが、どうもちがつていけない。僕が一番できない様だ。



(そうではない)〔担任の短評〕

色々なことに奮発をしなければ大変だと思った。5時間目の体操の時間に宮下先生に二度注意された。目を見ていただくのも今日で終った。僕が今日、本とうに勉強にとりかかったのは8時半である。それは湯にはいったのと、目がいたいのである。そのためねるのが10時になった。

○1916年4月20日 (木)

晴天南風強し。今日は学校へ7時30分に出て行つた。第二運動場へと走を急がせた。大分来て居た。それから、いよいよ遊びにとりかかった。はんとう台の上にあがっている時、遊動円木にのっている時等、先生がおとりになると大いそぎでおじぎをする。2時間目の習字、終に習字の紙を集めさせていただいた。算術の宿題は皆あつた。読方の書取は十字ちがつたと思つた。僕にとつては好成绩である。帰りは中学の2年の人の青木君と帰つた。写真をうつしたのは白山である。そこへうつしたのをとりにいった。見れば、まるでへんにうつっていた。白山から電車で家へ帰つた。家へかえつて算術の宿題と復習をしたかと思うと、下女が「ごはんでございます」とよんだ。

ごはんをすまして6時に机についた。かばんを開いて見れば、荷物は一ぱいに満ちていた。いよいよ取りかかつて居る内に色々な科目の予習、復習が終る。机の上を見れば、すんだ本がたくさんつんである。その時は実にせいせいした。かばんの中に残るは一さつ。何であらう。地理である。これがすめば、今日は終るのである。ねる時も近づいて来たが、まだ1時間ある。様々な事をしたが、9時半にはまにあつた。

(なかなかまじめにつとめておいでのようです。おかあさまもおよろこびでしょう。4月

20日閱)〔担任の短評〕

○1916年4月21日 (金)

晴天。今日はねぼうをした。学校へ15分前についた。その時、図画のがくしをわすれたから、買いに行こうと思つてポケットを見ればがまぐちがない。それからそばにいた垣内君に金を借りて買いに行つた。図画教室に入つて、いよいよかくという時に至り、僕のそばの二人がかしてくれといったから、貸してやった。(僕は今日ちよつと或る人の字を見てちよつと気にいったからこんな字を書いたのである)

今日は2時間目の Sweet 先生である。非常に丈が高い。笑いが面白い。作文は冬の学校から家までのを書いた。

目はすっかり直りました(目の病氣はロホーサーケツマクエンであります)。4時まで遊んでかえつた。

夜、僕のをを整理した。時に汽車旅行がたというはがたを見た時に死んだ妹〔註〕



妹愛子1907～1914」の事を思いだした。5年の時ぐらいである妹とよくかるたをやった。僕の毎日の運動は、遊動円木は一日おきに決めた今はやった。消灯は10時になった。

○1916年4月22日 (土)

小降り後晴天。今日は朝習う事がないから、おそく起きた。さほど降って(雨)居なかったから。ゲートルをはかなかった。2時間目からやんだ。今日も宮下先生にやられた。気をつけなければならない。連続すれば信用を失ってしまう。今日はどこにも行くのをやめた。或る人はボートに、或る人はベイスに、或る人は博覧会にいった。今日は時間があまる程沢山あった。それであるから本を読んだ(学校以外)。湯にはいつて9時半にねた。兄さんがかえっていらつしやつて今日一日、おとまりになる様だ。

○1916年4月23日 (日)

雨天。今朝は7時に起きた。12時に家を出てゆつくりとあるいて行つた。午後2時から始まった。一番初めに開会の辞があつた。その次に主事の桐陰会〔註…東京高等師範学校附属中学校(旧制、1902～1949年)の卒業生の同窓会。当時の校長兼桐陰会会長は嘉納治五郎〕の話があつた。その次に卒業生のすぎうちという人の演説があつた。それは僕には有益な事と思つた。又大学の人のお話、高等学校の人のお話皆僕等の将来の事について話してくださつた。おもに人物と強くなれという事と、勉強とを注意された。余興もおもしろかった。乃木大将と本能寺というのとの薩摩琵琶をした。僕等全体で歌つた桐陰会会歌はいかにも僕に強みを感じさせた。終のお菓子は僕が二階から下りて来た時にはあまりなかったで、そんなにたべられなかった。今日は忘れ難き事を教えられた。帰つて来て夕飯をたべて、休んだ。あんまり勉強をしなかった。いつも通りにねた。今日の事は、ねてから、もう一ど思いだそうと思つてとこについた。

(なかなかよくかいてある)〔担任の短評〕

○1916年4月24日 (月)

晴天。今日は、ねぼうをしたが8時には、たつぷりあつた。今日僕は朝は運動をしないときめた。それから、かえりは、なりたけ遊ばない様にきめた。僕の体にさわるからである。このごろ毎日、洋服をぎぶとんの下にやつたり、ふとんの下に敷いたりしているけれどもなかなかよく、つかない。今日の地理の時間は、なかなかこわかった。剣道の道具は僕は全体もらわなかった。全体もらったものは皆、喜びの顔であつた。ことに中島君等は喜んで居た。別にかくことがない。〔剣道の竹刀のスケッチあり〕



○1916年4月25日(火)

晴天。朝洋服を着た時、すぢがぴんについて気持がよかった。学校へ行つて運動をしない様に、こらえていたが人のやっているのを見ると、やりたくてたまらないから、はげしくない運動をする様にきめた。今日の書取は十はちがわなかった。四、五日前に、僕が桜草を一本もらった。或る時はかれ、或る時は、生きて。まだ生きている。今日は歴史の復習がのこつてしまった。あした、さつそくやろうと思った。すこしおそくねた。

○1916年4月26日(水)

今朝起きた時、気持がよかった。学校からかえつてすぐ歴史のおさらいをやった。今日、Sweet先生の時間に、Show me your two pens. といわれた時、僕はペンを出した。その時、ふでいれの中から色々な物が出て転がり、ゆかにおちた。机の上は非常にごたごたになった。先生は笑っていた。皆も笑って居った。体格検査の時にくぼた君を見て驚いた。僕の二倍もありそうだ。今日は読方の予習が出来なくなつてしまった。湯もわいた。それで40分程とられる。しかしこれだけの、影響ではない。一たいに、僕は仕事をするのがのろいのである。これからもう少し機敏にしようと思う。今は10時20分である。

○1916年4月27日(木)

晴天。今日は昨日より寒かった。今日は朝長く、習い過ぎたため家をおそく出た。学校の事で別にかく事がない。唯だ宮下くんの日記の画のうまい事に驚いた。家へかえつて来たら、母が休んで居った朝から休んで居ったのだけれども、いつかは学校へ行くだろうと思つて居たら、そうたいした事もない。僕は今日夕飯をたべてから水を草花にやった。国語のしきつさんはかえした。どうもこのごろは時間がおくれていけない10時だ。

(4月28日 相変わらず、ひきしまった勉強ぶり、喜ぶ外はありません)〔担任の短評〕

○1916年4月28日(金)

今日は、あしたははれると思つて学校へ4時の鐘のなるまで居た。勉強をちつともしなかった。遊びはつづけてしまったが、雑誌を読んだ。先生が、ばかに勉強の事をおほめになります。勉強によく実がいつているかはぎもんです。

(実をいれなさい)〔担任の短評〕

そんなに御いわれもうしては恐縮いたします。又先生が僕の机の上に日誌帳をおおきになると、それを僕の付近の人が、ふざけて見るのでしょうか。日記を見ます。これはよい事ですか、わるい事ですか。

(よくない。但しことわつて許されれば勿論差支えない)〔担任の短評〕

今日はひさしぶりで早くねた。



○1916年4月29日 (土)

5時半に起きた。空を見ればよくはれている。ただ霧が一ぱいかかっていた。したくをして坪井君の家へ7時すこし前についた。そうしてさそった。坪井君はほらがいたいそうで休んだ。伝通院へ来て電車にのろうと思ったならば上級生二人と岡山君とが居った電車を幾台かまって、ようやく乗った。こんで居る。ずいぶん苦しかった。二度乗りかえて南山路せんでおりて、渡舟に乗って向岸へ着いた。時を尚早かった。艇庫へついて見れば、わりにたくさん来ていた。中には和船にのっているものもあった。全体があつまって端艇部々歌を一番初めにうたった。それから優勝旗返納式があった。それから主事の御話がちよつとあった。僕は午前中ただボートの競争を見て居た。終にはあきがきて来た。午後からは、和船に乗せてもらった。船の中でボートをながめた。或る時風が非常にふいて来た。それに満潮になって来た。その時はちょうど上の方にいたので、かえろうと思つてもなかなかえれなくて、かえつておしながされてしまう。それから二人で櫓をこいだ。さすがにその時は前にすすんだ。青くなるほど舟がゆれた。長い間色々な舟にのせてもらった。とうとう優勝旗は甲のものになってしまった。終に桐陰会々歌を歌った。それから今日のせりぶりについてお話が主事先生からあった。その中で規則以外のものをたべたものが少しあるといわれた。その事僕の心の中はへいきであつた。(たべなかった)そのかわり、弁当はすつかりたいらげた。かえりに御菓子を五ついただいたが、これはおいしくたべた。かえりに蒸気船と競争したがかった。僕と友達二人とかえった。電車の中でも家へかえつて来ても、ボートのこいでいる有様などが目にちらつく。かえつてから日記をつけてねた。ゆっくりねられた。〔川岸の艇庫と河と上流の橋までの見取り図スケッチあり〕

○1916年4月30日 (日)

霧雨。今朝は7時半におきた。雨がふっていたのでつまらなかった。庭の草花の葉に露がかかつてそれが光っていた。金魚の水をとりかえてやった。4匹あつた金魚が今は1匹である。時々水をとるかえている。大きなかめにたつた1匹さびしいであろう。今より3年前に叔母さんからいただいたのである。どれも皆よい金魚である。2匹は大きな赤い金魚であつた。1匹は黒色で目の出たのである。これを称して出目金というそうである。1匹は今いきている少ない金魚である。2年半も他の金魚と遊んでいたのが今は1匹となっている。どんなにさびしいであろう。又友達をつくつてやりたい。この3匹の金魚の死んだわけは猫のためである。僕の家付近には数匹の猫がいる。僕はその猫を見ると癪にさわる。もとの家では、10匹ほどのかなりやをにがし、或いは自分で食つた。「うらみは深き猫」。僕は如何なるかわいらしい猫を見ても、にくらしい感じが常に起こる。水をとるかえて二階へくれば、堀を1匹の猫がのそりのそりとあるいている。僕はたちまち猫を追っぱつた。別にかくことがない。時間にねた。〔金魚4匹と瓶の中の金魚と猫のスケッチあり〕



○1916年5月1日 (月)

晴天。朝起きて障子をあげて出て行こうとしたら、鯉のぼりの車がくるくると軽くまわっていた。鯉は2匹とも体を横にして尾をなびかしていた。あだかも鯉が急流なる川を溯る様であった。時計は7時をうった。これは30分すすんでいる時計である。この鯉は深いかんじを僕に思わせた。〔7時を指している柱時計を見ているスケッチあり〕

今日は学校で大失敗をやつて来た。それは国語の第一課の書取が出た。50字出た中、18字まちがった。一失三点とすると、46点しかとれない。やや可であろう。近藤君も失望して居た様だ。『今日家へかえつたらうんとやる』とかいった。僕もそう思った。遊ばずに、せつせとかえった。即ち国語の書取を始めた。ずいぶんやったつもりだ。いろいろな勉強がすんだのは10時半である。しかしまだ歴史のふくしゅうが十分でなかった。あまりねむいから、とうとうねてしまった。

○1916年5月2日 (火)

曇天、後小雨降る。今朝は6時10分前に起きた。顔を洗い御飯をたべたのが6時5分であった。それからしばらく机にむき、20分まで国語の暗誦をやつたが、どうもよく覚えられなかった。それから博物の絵の具の塗ってないところがあつたのでそこにぬつた。ために、7時までかかった。英語を10分見て便所へ行つて学校へ行つた。家へかえつたのは4時であつた。夕飯がすんで、兄とballをやった。今日は、ほかにかく事はない。9時半より少し前にねた。

○1916年5月3日 (水)

晴天。今日は6時に起きた。顔を洗つて、二階へ上つて来た。そうしてカードを出して、書取の練習をした。第一課では趣おもむきという字に「き」という字をかきそえたためにちがつてしまった。①ではこれだけちがつた。②では熟語を一つと数えて六つちがつた。一字一字ならば七字ちがつた。それは僕の国語のノートの一番終にかいてある。

僕の母の病気はまだなおらないが、もうじき学校にでられるだろうと思う。今日のSweet先生の時間に上村君が何の気なしに、Readerをあげていたのだらう。Sweet先生がそれを見て、Shut the book, Stand upといわれた。それから上村君はたつた。何だか色々な事を聞いて居た。僕もそのときは、ぞつとした。時間がすんで上村君が「すごかつたぞ」といわれた。別におこられたのでもない様だ。4時10分前まで遊んで居た。家へかえつてもなんとなくなかつた。ねたのは9時半であつた。

○1916年5月4日 (木)

晴天、夕立、夜星出る。今日は夕にすぐ例の医者のところへ耳をみていただきにいった。三日ほど行くのである。4時から机についた。あしたは国語の書取に、英語のDictationが



ある。大急ぎだ。今日晩に親類の叔母がいらっしゃった。別にかくことがない。

○1916年5月5日 (金)

晴天。今日は6時10分前に起きた。寝まきをただして顔を洗いに行った。二階へ上つて来て、着物に着かえて、下へ下りて来て、朝のあいさつをした。それから朝飯を食べて、又二階へ上つて国語の二・三をさらって見た。皆んな出きるまでやって、英語をしらべた。英語は皆できた。8時20分前に家を出て学校へ行った。僕の方即ち一年の甲・乙組の二、三人は少し本を見たものもあつたが、僕はそれをさけた。二時間目の国語の書取は甲からきいたら、こわいそうだ。室へはいって来たら先生の御きげんが御わるいようであつた。この書取で、もれる(漏れる)という字をわすれた。これはひよつと思ひ出せなくなつたのである。それから紙礫^{かみつぶて}をまちがえた。次の英語の Dictation では、セミコロンの次を大文字でかいてしまった。まちがえはこれだけであつたと思う。

今日は学校で遊ぶずにかえつた。耳を見ていただいて叔父といつしよに僕の家へかえつた。叔父は僕の母を見てくださるのである。その家でかし葉餅をいただいた。家へかえつて5時に勉強をしようと思つても30分やつたが、兄が湯にはいろうといつて、外のしよぶ湯にはいった。今日は家でもかしは餅をくださった。今日は勉強をあんまりしなかつた。8時半に寝た。兄に今日の書取の形勢を話したら、まあよいといつた。

(よい日記。(5月6日)「担任の短評」)

○1916年5月6日 (土)

晴天風強くふく。今日は1時間目(学校の事)は英語であつた。僕は Macmillan をもつて来なくて Graded Readers をもつて来たのである。僕は中学校にはいつて作文の本と今日のマクミランをわすれただけである。これから尚注意しなければならない。今日は一年のボールの仕合があつた。まだ、ほかにあつたが僕は一年のだけしかみてこなかつた。乙がかつて気持がよかつた。このボールは面白く感じた。耳も今日で治つた。僕の体は完全無欠になつた。あしたは一部の6年の武田君と附属中学の2年の青木君とで市川へつりに行くつもりだ。

○1916年5月7日 (日)

雨天。朝起きて見れば雨が降っていたので、がっかりした。朝の御飯は遠足のかねての用意ののりまきをたべた。9時15分に青木君が来たから、何かと思つて出た。それは僕と一緒に武田君の家へ遊びに行こうといつて来たのである。武田君は青木君と僕とを、よんでくれたのである。色々三人で遊んで、武田君の家でお昼をたべさせていただいた。武田君の家に9時30分に着いた。4時迄遊びとうした。夕はんはたべずにかえつた。5時にか



えた。これはあまり雨がひどかったから、ぐあいを見たのである。そのため5時になった。菓子もいただいた。こん度の日曜又つりに行く約束をした。雨のために三週間ものびたのである。ちよつとしてねた。

○1916年5月8日(月)

晴天。朝、えんがわに出て見ると日本晴であつた。一点の雲だに見えなかつた。今日は学校から家へ大急ぎでかえつた。それから、荷物をおいて、あいさつをして出て居つた。それは海の博覧会である。地歴の先生の田中先生からいただいた紙をもつて行つた。博覧会の中を幾度見廻したかしのれない。幾度も々々さがしたがどうしても見つからないものがあつた。二度目である。家へ5時についた。一つ二つは書きつけて来たものもある。有益なる事と感じた。都合2時間45分間ぐらい見たわけである。僕一人で見たのであつたら、非常にかつてが出来てよかつた。このかつてというのは、或るものをちよつとわすれて、もう一ぺん見たいという様な事が出来た。博覧会の中では一厘もつかわなかつた。又見れたいものだ。草花に水をやつた。金魚の水もとりかえてやつた。8時30分にとこについた。

(こういう風に物を観る習慣を付けて置くことは一生にどれ丈の利益になるかわからない。何事にも其の通りになさい)〔担任の短評〕

○1916年5月9日(火)

晴天。朝学校へ行つて見ると僕の方の人が大勢きていた。首藤君や菊池君がヂイサンおはようと僕にむかつていった。ながい君も僕の事をジージーだのばあだのといっている。

(面白い。併し何故ですか)〔担任の短評〕

二、三分休んだと思うと一令がなつた。僕はそろそろと第一運動場へ出て来た。2時間目から皆と愉快

(勅諭、運輸、其の形と意味に連絡して覚えなさい)〔担任の短評〕

に遊び初めた。今日は朝から終りまでながい君と戦争をしていた。上村君ともやつた。この戦争は僕にはいつも絶えない。これもやはり第二運動場の戦いである。この遊びは決して喧嘩にはならない。僕はこれがゆかいでたまらない。今日、剣道の時間に僕の方のせんせいが京都の武徳会についての話とその様子を話してくださつた。先生はおかちになった。すぐ家へかえつた。僕はいつでもお菓子をたべない日はない。今日はいかである。これは塩でもんで火でやくのである。9時にねた。

○1916年5月10日(水)

晴天。朝5時半に起きた。学校で昨日のつづきの戦争をやつた。僕らの敵は益々増加し



て来て4、5人も僕にかかってくる。いくらほうぼう逃げ歩いて、どうしてもつかまってしまう。とうとう降参してしまった。一人一人ならばなかなかまけない。

〔衆寡敵セズ〕とは其の事である〔担任の短評〕

今日かえりに、月謝と寄付金とを出しに行つた。大塚君につれていつてもらつた。その時、ちょうど医者になる入学試験をうけて居た。大塚君は久保に用があつていつたが、僕もきくことがあつたので一緒にいった。二人で清水谷の停車場を目がけて下りて来た。その途中で大塚君は、僕は失敬といつて進みつつある電車にとびのつたが、なかなかうまい。僕の家は同心町だから歩いていった。

母はもうあした出て見るといつておられた。

〔御病氣であつたのですか〕〔担任の短評〕

二週間休んで居つたのである。夕方庭中へ水をまいた。気持がよかつた。水が葉から玉となつて落ちる。水をのまないでも、喉がかわかなくなるかと思われる。その時、草の頂上が日にやつと照らされていた。そこでその露は、金・銀と輝きの色をもっている。この光らされていた草の名はアスパラガスという。「アスパラガスの鉢のスケッチあり」英語の本にあることを思いだした。

Dewdrops are on the grass. They are shining.

今日は相当な時間にねた(9時半)。

○1916年5月11日(木)

晴天。今、日記を書いているが、7時27分30分である。今日皆んな練習の最後といつて盛んにRunningのけいこをしていた。翌日の事について宮下先生に昼休の時間に御話があつた。昼休みに昨日の連続なる大戦争を行った。僕の方は、首藤君と菊池君と僕であつた。敵は、広瀬君と近藤君と澤君であつた。或る時、皆がちりちりばらばらになつてしまつた事がある。その時、首藤君が近藤君と広瀬君につかまえられてこまつていた時、僕はそれと知らず敵をさがしていた。その内に澤君が来て三人で首藤君にかつた。その中に菊池君が応援にいつた。その次に僕がみつけて一目さんにそれに目掛けて突進した。敵も三人、こつちも三人。そこで六人はしばしかたまつてやつた。僕は澤君をまず倒して、首藤君を起こそうとした時、澤君に倒された。あまりはげしい戦なので、大抵一人一人ちよつと傷をした。今日はたくさん遊んでかえつた。明日がまちどしい。

○1916年5月12日(金)

晴天。朝5時半に起きた。6時までにはたつぷりまにあつた。6時5分前に家を出た(のうとみ君と大曲へ6時20分までにあつまる約束がしてあつた)そして大曲へ行つて見ればのうとみ君は、既に来て居られた。それからすぐ電車に乗つた。中はこんで切符をだせないほど



である。

ようやく渋谷へついた。人もだいぶ居った。やや遊ぶひまがあつたので遊んだ。僕は外の人三人ほどと先生とで玉川電車にのって行つた。競争に加わる人はずいぶん先に行つて居たが、電車で見える見る中にぬいて行つた。第一決勝点の所で下りて一町程もどつて僕等の真の第一決勝点へ来た。しばらくすると第一等がかけて来た。三年生である。二等は二年生である。三等は一年の乙組の白石君であつた。僕は応援してやつた。四等は一年の乙組の五十嵐君であつた。七等は僕の方の中島君であつた。なかなか形勢がよかつた。後から続々と続いて来た。名刺を受けとるのも大抵ではない。或る時、皆一緒にならんで来た事があつた。皆同じだといわれた。向こうから走つて来る様何かが押し寄せて来た様である。もう終かと思うと、また後から来る。やがて終らしい時に僕等は出て玉川へむかつた。あとからも20人ぐらい来た。

3年の人はあるくのがいやなのであろう。のって行つてしまった。石黒先生とのうとみ君と僕らであるいて行つた。向こうへ行つてから川岸で遊んだ。榎山君が、長距離競争をした時、怪我をした。その怪我は胸のすこし下のあたりで車にぶつかったのである。今日は風が非常につよくて、砂がずいぶんたつた。会費の中のお菓子はおいしかった。また夏蜜柑もうまく感じた。お弁当は御飯が少ないし、砂がはいつたので六分の四ぐらいしかたべられなかつた。1時から2時までの間にかえらなければならぬ規則であつた。それから僕は前の川のもう一つ向こうの川へ遊びに行つた。その川で上級の生徒が泳いで居た。寒そうであつた。僕はここでメダカ等をとつて遊んで居た。そのうちに厚さ三分ぐらいの正五角形の石をさがした。これも上級の人にくれといったから、上げた。1時半に玉川電車に乗つた。車内は我が校の生徒だけである。車内には僕等が満ち々々ている。電車の中に30分居た。渋谷でおいて市内電車にのつた。乗りあきたので、またのるかと思うといやになつてしまつた。おまけに1時間である。電車の中で坪井君と二人で寝てしまつた。今日は僕はかけなかつたから、あまりくたびれもしなかつた。伝通院からこっちは伊藤君と溝口君とで来た。今日はよくねられた。早くねた。

○1916年5月13日 (土)

晴天。今日は7時15分に出た。澤君が休んだ。中には、くたびれた様な顔をした人もあつた。家へかえつて、晩に女中に明日の魚釣のお弁当の用意をさせた。6時頃、夕飯をすませて、伝通院の方へ向かつて、釣の道具をとりに行つた。伝通院の八百屋に聞けば飯田橋をわたつてすぐ左にあるといわれた。僕はこの辺にないのかと思つて悲観した。しかたがないから行つた。その道でも目を皿の様にしながら足もいそがせた。飯田橋まで10分しかかからなかつた。そこで橋をわたつて甲武線〔現在の中央本線の前身〕の下をとおつて左へ行つたが、ない。それから右にはないかと思つて見たがなかつたので、電車通りをすこし行つた。



そのために時間がたって、くらくらなってきた。それから引きもどして、甲武線の下をとおつて、橋をわたりかけた。なんの気なしに向こうを見ると釣の針の絵が大きくしるしてあったので、そのあたりを見ると漁具、釣道具とかいてあったので大急ぎでかけて行つて買った。買物が終つて時間を見れば7時15分前であつたので、勇気をだしてかえつた。かえつてから、あしたの釣の用意を皆んなした。(このつりは前の日曜の釣のつづき。それは前の日曜は雨が降つてだめであつたからのばしたのである。日曜の四度目である。三度も雨ばかりで行かれなかったのである) 早くねた。「僕の家」から釣道具屋までの地図あり。竹早町、僕の家、同心町、八百屋、伝通院、大曲、江戸川、飯田橋、甲武線、釣道具屋」

○1916年5月14日(日)

晴天。魚釣。今日は5時半に起きた。色々な事をやって8時5分前に出た。そして一部の6年の武田君の所へよつた。朝飯をたべて居つた。武田君も用意が出て居た。大曲で電車に乗つて、江東橋まで行つた。すると2年の甲の青木君は既に来て11台もまつたという。それから汽車にのつて市川へ下りた。それから町をいそいで通つた。田んぼ道へ出た。パイプ工場が見えない。その辺の人に聞けば三町程の所に見えた。この見えなかつたわけは、曲がついていて森の影にいたからである。その時、武田君が、あつわすれたものがあるといったので、僕等二人はそれに問うた。それはミミズである。魚の餌がない。そこで三人は今から田のふちのじめじめしている所を5分間ぐらいつつさがしながら、工場へ向かつた。一匹武田君がとつたきりである。それから池でとろうといつて、それをやめて、池へいった。砂土で居ない。そこでごはんつぶでやつて見ようという事になって、にぎりめしや、すしなどを一つこわし、いよいよとりかかつた。一番初めに僕がつつた。小さな生簀いけすのようなものにいられた。その次に青木君がつつた。僕はその中に4匹釣つた。その時、武田君と青木君は1匹であつた。その中に青木君は5匹になつた。僕は6匹であつた。武田君は2匹であつた。ひるのごはんを食べた。二人はシャクシャクといつて居つた。ちょうどその時、武田君の父がいらつしやつた。武田君の父はこの会社の社長である。午後からまた引きつづいてつた。武田君の父もおつりになつた。4匹もつられた。そこで、そこで僕はさてまけてはたいへんと思つた。またもや3匹もつた時は2時であつた。青木君も2匹つた。そこでくだものをたべた。お菓子もたべた。しかしお菓子ほどのお菓子ではない。こっちからもつていったのをわけたのだから、すこしである。今日は家で、必ず一番多く釣つて来るといつて出て来たのである。最初につれた心もちさ。浮きが沈んだ。そこであげ様としたら、びくびくしておもかつた。「釣糸と浮きと水の中の針と餌と魚の図あり」

釣つたけつかは青木君が9匹、武田君が7匹、僕が10匹である。今日は実にゆかいな日であつた。魚は鮒である。4時38分の汽車で市川を出た。4時に工場を出た。ずいぶんその間あわてた。武田君のと僕のと一緒にしたので大曲でおいて、武田君の家で8匹、8匹



にわけた。家へかえって金魚のはいつているなかにいれてやった。湯がわいていたのではいつて9時半にねた。よい気もちでねられるだろう。

(実に愉快な一日、羨ましい気がする。愉快に満ちた日記。中の所々の批評を御覧なさい。
15日)〔担任の短評〕

○1983年5月15日 (月)

晴天。この頃は暑いから、5時半におきる。

今日は5時半におきた。朝すこし、机にむかつて学校へ行った。修身の時間の時に、送迎会の時のお菓子の事が出た。僕のこの時の事をのべよう。お菓子が出た時、お菓子に種類があった。僕はその種類を一つずつとるのかと思って、四つ五つとった。そして人を見ると、種類ではなくて、自分のすきなものをたべていたのである。そして手に二つ三つもって、急いでたべていた。それから僕は手にもつていたのをみんなはなして、人よりなおもよいたべかたをした。それは一つずつたべていったのである。二つ目のをたべているうちに、段々なくなっていく。これでこのお菓子はたべ終わるというとき手が二、三本でそこにあったお菓子がなくなった。そこで僕はほかへ行つて見たが、どこもからである。おせんべいを四、五枚たべた。なかには、ポケットにぎゅうぎゅうつめた人もあった。

(だんだんおして行かねばならぬ、お互いに)〔担任の短評〕

今日、僕は剣道の道具をいただいた。家へかえってから3時間ほどした(勉強)。9時にねた。5時に起きる約束をした。

○1916年5月16日 (火)

晴天。朝は6時におきた。予定に30分おくれた。今日は父の命日である。書取は四字ちがった。今日は日がかんかと照った。そこへ僕等の如き活動をする者は、汗が雫とたれる。僕もその一人であるから、しゃつなどはぬれて、気持がわるい。家へかえってさつそく、20分間ほど、からだをふいて汗をすつかりおとした。9時半にねた。

○1916年5月17日 (水)

曇天にて後雨天になる。今朝5時半に起きすこしやった。7時30分に出た。英語のDictationがあった。大抵あった積もりだ。僕は今までの中で国語が一番むずかしく感じた。国語は即ち、読方と書取と作文である。この間、作文は可であった。終におつとめなさいと赤字でかいてあった。国語の力がないと何をするのでもそんであるから、一層奮励努力しなければならない。

(損というより日本人としては恥辱である)〔担任の短評〕

今日は祖母の命日である。今日は雨が降ったので自由に遊べなかった。兄が夜寮へかえつ



た(とまっていたのである)。9時若干過ぎにおきた。

○1916年5月18日(木)

雨天。学校へ行つて見れば、もちろん雨天の例であつた。四、五人と鬼ごっこをした。雨天の時はあぶないから、気をつけて走らなければならない。午後まだ雨が降つて居たがしかし、さほどでもないので合併体操をやつた。耳の中に水がたれるのがまんじきれなく時々かいた。それがすむと講堂で運動会についてのお話があつた。今日は雨が降つて家へ帰つてから、静かで気持がよかつた。9時半にねた。

○1916年5月19日(金)

雨のち晴。今日は朝家をおそくでたので、おくれたかと思つた。その上に、剣道の道具の様な重いものをしょつていたのである。学校へついたら二、三人のものが、「君、まっさおな顔をして大急ぎであるいて居たね」といつた。それは実際であるかもしれない。僕の顔は自分で見る事は出きないから、そうだろう。剣道は剣道着を来て人にうたせたり、自分がうったりするけいこをした。読方の時間の甲乙の書取の正しい事の競争は面白かつた。勝は乙であつた。即ち僕の方の級であつた。かえりに遊んで行つた。4時から勉強を初めた。釣でとつて来たこの間の鮎はまだ生きている。10時にねた。

(丹精してお飼いなさい)〔担任の短評〕

○1916年5月20日(土)

雨天。今日は朝から降りだしそんな天気であつた。すこしたつと天はぽつぽつと雨を降らした。運動会の準備もあやしくなつた。やみそうもない空模様である。一時間ほどまつたあげく、東京天文台へ問いあわせたが、長く降るということであるので、運動会の準備ができなくなつた。残念にもあしたすることが出来ない。家へかえつて見れば入梅の様である。今日はしとしととして心持がわるかつた。8時に消灯。

○1916年5月21日(日)

曇日。今日は6時半に起きようと思つて寝たけれども7時すこし過ぎになつてしまつた。午前に綴の宿題をなおした。それから国語と英語をやつた。あとは遊んだ。12時に家をでて、学校の準備をしようと思つていつた。まだ早かつた。僕は椅子運び掛であつた。2時頃で役は終つた。それから、皆で2時間程遊んだ。家へかえつたのは5時15分前であつた。中央幼年の兄(次兄龍二)もまだ家に居られた。兄は日曜毎に家へかえつて来る。釣つて来た鮎は3匹になつてしまつた。水をと리카えてやつた。独逸の様子の話を兄に聞いた(午前)。8時にねた。晴れるだろう。

○1916年5月22日 (月)

曇天。5時半に起きた。雨が降って居るかと思ったら晴れて居たので喜んだが曇って居た。出る時思案をしたすえ、とうとうカバンをもつて行くことにきめた。月曜の用意をして、またかきをもつて出かけた。むろん運動会の用意もして行つた。一人で空を見て雨が降りそうに思っても大ぜいの中で空を見ると曇って居る様な気がしない。学校へ行つた所が皆がにもつをもつてこないで、骨を折り損をしてしまった。それから応援旗をわすれて来た。最早帰るにも及ばなかった。集まれの合図であつた。まず初めに君が代を歌つた。客は二、三人ほどしかいなかった。いよいよ運動会の運動が始まつた。僕は百米に出たが、終から二番目であつた。色々の競技を見て、計算競争をやる番になつたので、支度をして出た。如何なる問題が出るかと思いつつ走つた。見れば「 $152 \div 25.5 + 3.8$ 」とあつた。一心にかんがえた答えは9.9と出た。僕がはしろうとした時には前に数人居た。走る内に三人ほどにぬかれた。むろん一等二等にはなれなかった。答えはあつて居た。しばらくあつて二人三脚があつた。僕と菊地君は、どっちの足を先にだすかという事を計画しておいた。向こうは計画がなかった。そこで非常な差が出てきたので即ちにして白がかつてしまった。賞品として、まんじゅうとおせんべいとをいただいた。つづけて、綱引があつた。これもかつた。賞品は前と同じであつた。やがて正午になつたので、中食をした。午後からはサックレースだけである(僕のやるのは)サックの中にはいったとき他の人を見ると、ひるがたつた様であつた。出る前は皆寝ているのである。銃の音と共に起きあがるのである。すぐおきられたが、うまくとべないのでやはり後の方であつた。選手競争は大いに応援してやつたが終に迫いこされてしまった。3:2:1という順であつた。皆すむと、桐陰会々歌を歌つた。終に嘉納校長が今日の運動会について一言いわれた。最後に万才三唱した。又椅子を運びかえしてかえつた。家へかえつてから学校以外の本を読んで早くねた。

○1916年5月23日 (火)

晴天。朝5時半に起きた。朝から日がよく照つて、よい天気であつた。午前は勉強した。午後からどこかへ行きたくてたまらなかつた。その時、ちょうど二年の青木君が来た。青木君もつまらなかつたから、君の家へ来たんだといった。二人で植物園へ行こうと思つたが二人ではつまらないからやめて、家^{うち}でまりほうりや色々遊んだ。青木君は夕飯をたべて6時頃かえつた。日記をつけてゆつくりねた。

(根気よく面白い日常の生活を表したよい日記。5月24日) [担任の短評]

